漢法苞徳塾資料	№. 292
区分	論説
タイトル	**臨床にとって古典とは何か**
著者	八木素萌
作成日	1990.08.25　　夏期合同合宿

◎難経まで

［１］＊大塚敬節の創元社の『漢方医学』との出合い

＊石原明の『傷寒論』の講義と、漢方界の風潮・口訣主義への疑問

＊鍼灸医学へ～『難経』との出合い

＊最初のテキスト『南京中医学院；難経訳釈』

参考―『難経の研究』本間祥白

『難経本義諺解』岡本一抱

『難経鉄鑑』広岡蘇仙

『難経古義』滕万卿

『難経疏證』丹波元胤

その他

［２］＊臨床のために先ず学んだ「経絡治療」

参考―『誰にもわかる経絡治療講話』本間祥白

『鍼灸医術の門』柳谷素霊

『医家のための鍼術入門講座』間中喜雄

『鍼灸経絡治療』岡部素道

『漢方医術復興の理論』竹山晋一郎

『鍼灸医学と古典の研究』丸山昌朗

『素問医学の世界』藤木俊郎

など

［３］＊『難経』を読んで受けたショック

「六部定位脈法」が記述されていない事

１８難の配当に諸説がある

１３難、１６難の記述の中身・呼吸補瀉論や迎随補瀉論の難経説

７０、７４難の問題

８１難の問題

奇経論と１５絡

◎脈論史のイメージ

＊五臓辨脈・経脈辨脈の試み；１難にある記述；霊枢の人迎気口脈診；

素問の三部九候・難経脈法と傷寒論脈法

＊経病と臓腑病の病證論的区分の成立と三陰三陽辨脈の提示および太谿脈診や

陽脈診を提示した『傷寒論』、外感病と内傷病への対処

＊『症因脈治』〈清・秦〉と『脈因証治』〈宋・朱〉と『奇経八脈考』

＊病証解析をより正確にする為の脈状診へ

＊脈論史と「六部定位脈診」

＊４９難の啓示しているもの

◎脈状記述三題

肝脈～～双葉の若芽のように濡弱で伸びやかな脈、和やかな春風が新緑の楡の樹木をソヨソヨと吹き渡って行くような脈、（弦）

心脈～～存分に繁茂した樹木の梢がたわんで垂れ下がっているような脈、磨いた玉の連珠を撫循するときの感じの脈、（鈎）

脾脈～～呼吸の間・中位に和緩にハッキリ感じられる健康状態の脈、（緩）

肺脈～～枯葉がスッカリ散ってしまった梢が、葉の重みがとれて粛然と立ち、それが秋風に震えているように軽虚で浮いている状態の脈、（濇・毛）

腎脈～～冬の盛りには水も氷結して石のようになり・氷の表面はツルツルと滑り・低く沈んだような脈、去来する脈の姿は浮では大きく沈では鋭くて・ちょうど雀の喙の濡れ滑る様子のような脈状、沈位に按じて濡指を浮かべると拍ってくる脈拍は実になる脈状、（石）

太陽病脈～～尺寸ともに浮

陽明病脈～～尺寸ともに長

少陽病脈～～尺寸ともに弦

太陰病脈～～尺寸ともに沈細

少陰病脈～～尺寸ともに沈

厥陰病脈～～尺寸ともに微緩

督脈病脈～～寸関尺三部ともに浮緊で弦長に拍動する。

衝脈病脈～～寸関尺三部ともに沈脈で牢弦長に拍動する。

任脈病脈～～寸関尺三部ともに沈脈で緊細で実長に拍動する。

陽維病脈～～寸関尺三部に斜めに浮いており、寸は橈骨外側に拍動し尺では尺骨寄りに内側に拍動する、主に右手の脈口に出る。

陰維病脈～～寸関尺三部に斜め沈んでおり、寸では尺骨側の中央部に寄って拍動し、尺部では橈骨外側寄りに拍動する、主に左手脈口に出る。

陽蹻病脈～～両手の寸部に脈が浮いて強く拍動する。

陰蹻病脈～～両手の尺部に脈が沈緊に拍動する。

帯脈病脈～～両手の関部に脈が浮緊に拍動する。

参考脈書

『四診抉微』清・林之翰
『脈抉彙辨』清・李延是
『診家正眼』明・李中梓
『脈理求真』清・黄宮綉
『「奇経八脈考」校注』李時珍撰輯、王羅珍・李鼎校注：上海科学技術出版社

◎四十九難の記述に見える病因観

［１］病んでいる臓の病証と病因を意味する病証とが並行して表現される。

［２］病因を意味する病証とは、病因が帯びている五行性が生理的病理的な五行性―つまり風は木性の邪・木性の生理的病理的なものは肝、故に肝―木の病理表現～～を示すものとして表現される。

［３］七十難・七十四難の記述から考察すれば井・滎・兪・経・合の反応表現をも示すと認識している。

◎16 回学会での間中博士の証の定義と、17 回学会での長沢博士の「湯液の証についての基本問題」の重要性について。

以上